

登米高の志教育

「かかわる」「もとめる」「はたす」
～ Develop your ambition! ～

令和元年度 第2号

令和2年3月1日発行

企画・編集：志教育担当

登米（とよま）講座を開催しました （2月17日@音楽ホール）

2月17日に1学年の「総合的な探究の時間」における「地域探究Ⅰ」の関連講座として、「登米講座」を実施しました。仙台大学客員教授である伊達宗弘先生を講師にお招きしました。伊達先生は登米伊達家第16代御当主でもあり、本校の卒業生でもあります。

同じ「登米」という漢字でも「とめ」と読むときもあれば「とよま」と読むときもありますが、地元の歴史は知っているようで知らないものです。この講座では、江戸時代に登米の基礎を築いた白石家（登米伊達家）の歴史を中心に知ることによって、日々学んでいる登米について知り、改めて見つめ直す、機会となりました。

初代である白石宗直公の登米開府時の苦勞（北上川の河川改修等）などの功績をはじめとして、登米を治めた歴代当主の行ってきたこと、仙台藩主伊達家とのつながり、明治以降の発展など短い時間に凝縮されたお話を伺うことができました。

講演の終盤には後輩にあたる1年生の生徒諸君に対して、「健康」、「常識」、「協調心」、「向上心」の4つを大切にすること、見通す力、直感力、洞察力を磨くために、各科目の学習に取り組んだり小説など本を読んだりすることをメッセージとして送っていただきました。

伊達先生から学んだことを生かしていけるよう、限りある日々を大切に有意義な高校生活を送ってほしいと思います。

～聴講したみなさんの感想より～

・ずっと登米市に住んでいてこのような話を聞いたことがなかったので、良い経験となりました。

・命の大切さや自然の大切さなど今の代まで受け継がれてきていることがすごいと思いました。自分たちはそのような歴史を知っていかなければならないと思います。



講師 登米伊達家第16代御当主
仙台大学客員教授 伊達 宗弘 先生



↑ 講師紹介



↑ 講演の様子

- ・とても歴史ある場所に住んでいるんだなと改めて実感しました。
- ・詳しく知ることができて本当に良かったです。豊里町にも少し関係していたのがうれしかったです。
- ・高校周辺にも当時の名残を感じさせるものが残っているんだなと思いました。機会があればぜひいろいろな場所に行ってみたいと思います。
- ・伊達家の人たちがどれだけやさしく、強いかが分かった。登米の歴史的なものへの見方もだいぶ変わりました。
- ・登米伊達家の人々は人のために行動していると思いました。「薪能」や「とよま秋祭り」などは帰農した人々によって今も伝えられていて、すごいと思いました。
- ・登米小学校の校歌の中に出てくる歌詞は登米が出来上がった歴史を忘れないようにするための校歌だということもわかりました。
- ・登米の伊達家は十数代にわたる主たちが登米の領地改革に力を入れ、農民や商人といった人たちからも厚い信頼を置かれてきたから、今日の自然豊かで歴史あふれる登米になったんだと感じた。
- ・登米にも深い歴史があるというのが分かったので調べてみるのも良いなと思いました。
- ・今回学んだことをできるだけ忘れずに生活していきたいと思いました。
- ・初めて知ることも多くあり、登米町ってすごいなと感じました。
- ・伊達宗直さんは町の人や仲間のために尽くし、そして誰からも尊敬されていてとてもすごい人だと初めて知りました。私も宗直さんのように努力していきたいと思っています。
- ・人を大事にする大切さも学べたので良かったです。
- ・これからもこの街を大切にしていこうと思いました。
- ・誰かのために何かをしてあげることがはすてきだなと思いました。私も誰かのなめに何かをしてあげることのできる人になりたいと思いました。
- ・健康、常識、協調心、向上心を身につけたい。これらを忘れないようにしていきたい。
- ・登米のことを第一に考えて、考えたことを行動に起こせる素晴らしい人だということがわかりました。
- ・平和の尊さを改めて感じることができ、今が当たり前ではなく昔の方々があつての今なのだと思いました。
- ・「人間は先を見通す力を持っている」という言葉に感銘を受けました。
- ・親近感がわきました。
- ・普通の暮らしができてることが一番幸せだということが分かった。
- ・これからもこの登米という地をつなげていきたいです。
- ・昔の人たちが並々ならぬ思いで開拓した土地を大事にしなければいけないと感じた。

跋 1年生のみなさんの感想の中に「人のために」という感想があり、とても印象に残りました。自分のことだけでなく、他者への思いやりのできる登米高生、とても素晴らしいと思っています。ぜひ続けていってほしいです。(文責：志教育担当 小野寺亮)